

光照寺旅行（秩父）

移動聞法会法話

二〇一五年十一月二十一日

「信がなくはいたずらごとよ」法話

光照寺 住職 池田 孝郎

光照寺旅行（秩父）

移動聞法会法話

二〇一五年十一月二十一日

「信がなくはいたずらごとよ」法話

光照寺 住職 池田 孝郎

資料

一 蓮如上人、幼少なる者には、まず、「物をよめ」と、仰せられ候う。また、その後には、「いかによむとも、復せずは、詮あるべからざる」由、仰せられ候う。ちとこころもつき候えば、「いかに物をよみ、声をよくよみしりたるとも、義理をわきまえてこそ」と、仰せられ候う。その後は、「いかに文釈をおぼえたりとも、信がなくはいたずらごとよ」と、仰せられ候う。

（『蓮如上人御一代記聞書 二一五条』 聖典八九五頁）

法話

皆様、幹事様から大変なご配慮をいただきましてこの車内で、移動聞法会を急遽、行うことになりましたので、一つご了承承願したいと思います。本来ですとホテルで立派な会場が設定されて、特別会場が設定されているということでしたが、諸般の事情というか、連休とかこういう渋滞ということでございますから、そこは可となく時間短縮の為に、ホテルでゆっくり玄吾先生がやるであろう三十分を勤めようかと思っております。こういうバスの中で玄吾先生の名代を勤めて、三十分というような時間の中で、お話をさせていただきたいと思えます。皆様の所に玄吾先生がお話になるこの講題も、玄吾先生がお決めになりました、「信がなくはいたずらごとよ」と。『蓮如上人御一代記聞書』の中から玄吾先生が話すということで、副住職に、そこをコピーして皆様に渡すようにとこういう事前の話がありまして、こういうコピーが出来ておりましたが、皆様

のお手元にそのコピーが行き渡っていると思います。全部玄吾先生の講題の選びです。唯、池田が勤めろということでありますから、以外のこととは玄吾先生が何を話すか分かりませんが、私は私として話すしかないということですので、一つお許し願いたいと思います。これに入っていく前にエー、口が回らないなあ。坂道ということがありまして、私の老化というものもありまして、口が回らないところは坂道のせいか、住職の老化のせいかとこういうことで、一つ勘弁して頂きたいのです。三峰神社を参拝した後ですね、こういう山道を下っていくという実がありがたい中でお話をさせていただく機会を与えていただきまして、私も人生七十三年でこういうのは初めてではないかと。私も初めてというのは嬉しいという、まだ初らしい気持ちがあるにありまして、人生初体験だったら良し、バスの中で移動聞法会だからやってやろうという感じでございます。それでこういう右に左にカーブしていくのも、人生を一つ象徴しているかと思うのです。右に左に右往左往しながら人生は歩んでいくわけでありますが、上り坂下り坂まさかの坂を右往左往していく実体験の中に、「信がなくはいたずらごとよ」という蓮

如上人のお言葉をいただいております。誠に絶妙ではないかと思ます。皆さんが右に揺れると逆に私は左に揺れるということなのです。皆さんが左に揺れると私が右に揺れるということになるのですよ。そうではないですか。右と左があべこべに揺られていくわけですが、見ていると同じ方に揺れているけれど右左がちがうのでございますよ。こういうのが実に絶妙ではないかと思うのでございますが、前置きはそのようなことで、まず車の中で文字を読むというのは、普通止まっています、老眼で近眼で白内障が入っていて、こういう電気の暗いところで読むというのはまことに難儀でございますが、私だけが難儀ではないと思います。私と同じような難儀な方がおられると思うし、なあと蛍の光で私は勉強してきたからこれくらいは明かりなら明るくてよく見えると、そういう人もいるかもしれません、ちよつとまず読んで見ましよう。

講題「信がなくはいたずらごとよ」、この「信がなくは」と点が入って、「信がなく

ば」と両方よろしいと思いますよ。普通は「信がなくば」と言っていますけれど。よく見れば私が車に揺られて点が見えないのではなくて、点がないのでございます。「信がなくは」でも結構でございます。「信がなくば」でも結構でございます。それは読み癖ということでございます。これはどういふことかということ、『蓮如上人御一代記聞書』、『蓮如上人御一代記聞書』というのは蓮如上人が亡くなった後、蓮如上人の第十男、実悟が聞書きをしたと言われるのです。蓮如上人の場合前々住上人という言い方をするのです。前上人とは蓮如上人の次の方、九代目の実如上人。『御一代記聞書』で前々住上人と出てくるのが蓮如上人ということになるわけですが「前々住上人申され候」などという形であるわけです。蓮如上人が言われた言葉を聞いて書いた、という聞きみたいものです。聞いたものを書き残し、それを後世に残そうとこのように編集されたものでございます。

一 蓮れん如上じょう上人じんにん、幼少なる者には、まず、「物をよめ」と、仰おほせられ候う。また、その

後は、「いかによむとも、復せずは、詮あるべからざる」由、仰せられ候う。ちとこころもつき候えば、「いかに物をよみ、声をよくよみしりたるとも、義理をわきまえてこそ」と、仰せられ候う。その後は、「いかに文釈をおぼえたりとも、信がなくはいたずらごとよ」と、仰せられ候う。

〔蓮如上人御一代記聞書 二二五条〕 聖典八九五頁〕

これはどういうことか、皆さんこれは読めば分かりますよね。読めばわかるということになります。しかし読めば分かるものを私が三十分、私の思いを語るということでありまして、仏法には了解がありまして、一つの文章を読んだら私はこういただきました、ということとを述べるということが了解といえます。了解というのは玄吾先生が話せば玄吾先生の了解になるわけでございます。私が話せば私の、光照寺の住職の了解になるわけでございます。ここに二十五人がおられ二十五人が読んで話せば二十五人の了解になります。百人おれば百人、何万人おられても同じなのです。同じ文章を読んで私はこの

ようにいただきました、というのが了解ということでございましてですね。私が何を言おうが玄吾先生と違うと言われようがですね。私の考えが違うと言われようが、それはそれでいいのです。要するに私はこのようにいただきました、ということがその人の了解になるわけでありませう。私の了解を話すということはどうかと思われませう。ようが、私はいつも同じですよ。「南無阿弥陀仏」ですから。「南無阿弥陀仏」の教えですから、「南無阿弥陀仏」から始まり、「南無阿弥陀仏」を話し、「南無阿弥陀仏」で終わればですね、一つもくるいなく一貫するという筋になるのですが、「南無阿弥陀仏」がわからなやか、か、「南無阿弥陀仏」は何でしようとかうなるでしょ。先ほど、三峰神社に二礼二拍手でしたか書いてありますが（二拝二拍手一拝）が神道の参拝作法）絵にも描いてありましたが、私は目が見えなかつたので絵だけ見ていたけれど、皆さんとやっていたようだったけれど、私は何処へ行つても「南無阿弥陀仏」であります。キリスト教の教会に行こうが、神社に行こうが、どのような宗派の仏閣にお参りしようが、どのようなところに行こうが、「南無阿弥陀仏」なのです。ですから私はどこでも

お参りできるのです。ただこういうことを言うと皆様えつと思いかもしれませんが、浄土真宗は神祇不拜じんぎふはいということがあるのです。さあどうでございませう。三峰神社は神社でございましてヤマトタケルノ命がイザナギノミコトとイザナミノミコトを祀り、御神体のようにございました。そういうものを持ち古来の山岳信仰といいますが、日本の神道の原点のようなものがあって、そこに仏教が伝来されてきて、密教との合体ということに、イザナギノミコトとイザナミノミコトを御神体としてということの中に神社としてあるということですが、これは簡単な話ではありませんよ。江戸時代までは神仏混淆しんぶつこんこうといまして神社もお寺も一体だったのです。ところが明治になりました。廃仏毀釈はいぶつきしゃくということで、皆神社にするということでお寺を壊すとか、坊さんを還俗げんぞくさせるとか、そういうことが明治にありまして、一時はそういう事だったのです。そこで破壊されたお寺も結構日本ではあるのです。坊さんも一時は還俗させられて神主のような形で神社庁に参つたと聞いております。しかし、国家神道となった中に、仏教をぜひ残して欲しいという中で、明治政府に忠誠を誓うがゆえに残してほしいという中で、それなら国家に忠誠を誓

うなら仏教寺院を残そうと、仏教を残そうという背景があるのです。ですから、その辺の話をするとき悲しい思いもするし、今残っていることの不思議さも思うし、浄土真宗七百五十年と簡単に言いますけれども、大変な歴史をくぐってきて、ここに私たちに、此の仏教として、浄土真宗として残っていることは、本当に先人のご苦労とかがある、ということをおもわなくてはいけないと思うことでもあります。そして、私はですね、やはり世界の国々に行っても、キリスト教の教会があればそこに礼拝（らいはい）されて、キリスト教では礼拝（らいはい）と言います。こちらは、らい拝と言います。難しいですね。そういう言葉の同じ字でも違うところがあります。私は人が敬っているものを貶す必要はない。やはり自分が敬っている「南無阿弥陀仏」を貶されたら自分も心外な思いをする。要するに、人が敬っているものを貶す必要はない、というのが私の深い了解の一点であります。そして私に於いては「南無阿弥陀仏」であります。この一点が、私はどこに行っても変わりません。そこに初めてわたしは、どのような信仰を持った人とも、手をつないでいける世界が実現することが、私は大事なことだと思っておりますから、

信仰が違うから排除するということは私はいかななものかと思うわけです。これだけ言うとうと、浄土真宗の神祇不拝に対して私は異議を唱えることになってしまうのですよ。だからこの法話は難しいなあと思うのでございます。私は私の了解をお話するというのは、そういうところにあるわけでございます。ですから、一面のことで異議が出ることはいくらでもあるわけですが、私は冒頭にそう申し上げながら蓮如上人の「信がなくはいたずらごとよ」と、いうところをお話させていただきたいと冒頭にお話させていただいたところでございました。

さあ、ここには私の孫の真由ちゃんとか、唯奈ちゃんまでいるとそういうことでございまして、これは「幼少なるものは」というわけでしょ。皆様幼少でしょうか。幼少なのは私の孫二人ではないかと思うけれど、そういう意味で捉えてもまた如何かと思うのですが、しかし、ここに教育の原点、基本が私はあると思うのです。私は、小学校は男女共学でしたけれど、日本の儒教的な考えは男女七歳にして席を同じゅうせず。という

時代が、私の先にはあつたわけです。お寺では寺子屋というところで読み書きそろばん。というのを教えてきたという、江戸時代からずっときた。日本人には文盲（もんもう）とか、文盲（ぶんもう）とか、これもまた二つ読み癖があるようですが、私は文盲（もんもう）と。文盲率（もんもうりつ）、文盲率（ぶんもうりつ）どちらが正解なのでしょうか。川澄さん、物知りの淡海さん。「もんもう」か、「ぶんもう」か。辞書はなんて言つたつて「らしいはい」、「れいはい」、「さんげ」、「さんげ」が同じ字を書いてどっちが正解かというと字引がいう方が正解と。こっちが間違つてしまうのですが、そんなことないわけで、非常に難しいわけです。「もんもう」でも、「ぶんもう」でも勘弁させて頂いて、識字率というのは、日本は江戸時代でも高かった。明治になつても、義務教育は小学校という中に、それから戦前は、旧制中学というのがあつて、戦後は六、三、三、四とこういうようになって、また今日学制を変えらるというような時代に入っているわけでしょ。そういうことで私は日本人が江戸時代から明治へと、世界から日本が良く近代化を果たしたと。こういう近代において欧米が、どんどんコロンプス以降というか、世

界が植民地化されていく中に、日本が欧米に対抗したくらいの明治になってくる。今でも聞きますね。よく日本が一気に近代化できたという、それはアジアの優等生みたいな話を聞くのですが、私はやはり、私は坊主ですから寺子屋というのが江戸時代からあった。読み書きそろばんというのをやって、読み書きそろばんが出来れば基本的には、自分でものを読める、書くことが出来る、計算することが出来る。そうすると社会に出て行って出来るのですよ、どんな職業もどんなところにも。もっと自分でやろうと思えばいくらでも行けると。基本は寺子屋で読み書きそろばん、というものをまずできれば、自分ももっともっと学ぼうとすれば、どんどん自分の力で歩むことが出来たと、こう思うのです。日本がアジアの中で近代化を果した優等生といわれるのは、読み書きそろばんという伝統が寺子屋というところにあったと言いたいのです。私はその時代生きておりませんが、私が生まれたのは、昭和十七年一月八日何回も言いますが、太平洋戦争が始まったのは、昭和十六年十二月八日。昭和十六年と昭和十七年。一年違うようですが一か月なのです。その時は、私は生まれたばかりで終戦は昭和二十年ですから私は三つの

時。小学校に上がった時は新制。学制が変わりまして六、三、三、四という学制です。から、小学校六年、中学校三年、義務教育で立派に社会に出ていけるといふ。私の時なんか、いつも上野の駅に制服を着た集団就職と言われ、金の卵と言われ、集団就職で東京へ来るのが歳時記といったら俳句の人に怒られてしまうかもしれないけれど、今集団就職はないとしても、大勢が列車を借り切つて上野の駅に降りてくる。そして就職して行く。我々の時代は手に職を持つということが良く言われ、まず手に職を持てば人生食べていけると。こういう時代であつたかと思うのでございます。やはりその戦後の敗戦からここまでの復興を果たしたと言ふのも、日本人の底力だと思ふのです。それは日本人の読み書きそろばん、から義務教育といふものがあつたがゆえに、底力が戦後の敗戦から立ち上がつて、一時はアメリカまで抜いてしまうのですから。前はGNP（国民総生産）と、今はGDP（国内総生産）といふ表現は違つてきましたけれどGNPといふ時には、アメリカを抜いてそして一番になり、その後、二番になつて、なんて言つていたら今はGNPでなくGDPと變つてきたんですね。中国は日本を抜いて中国は二番

で、アメリカがやはりトップである。アメリカもだいたい衰退してきた。中国は日本を抜いて二番だと。南シナ海でも大同土だといって世界の大国はアメリカと中国なんだと、中国はアピールしているという。なんで蓮如上人の話からここまで来たのか。これが私の特徴でございまして、要するにそういつても、日本は世界の第三位です。欧米にという中でドイツ、フランス、イタリアというと先進国です。すごいなあと思うけれども、やはり経済的な位置づけは世界三位なのです。それからノーベル賞だってアメリカに次ぐくらいの人数を排出しているということを知ると、日本人の近代化を果たした力、それから敗戦から立ち上げってくる力、そして優秀なノーベル賞をえていくアジアでも世界でも、アメリカに次ぐような数からいったら開きがあるかもしれないけれど、しかし、上位を示してくる。こういうところは幼少なる者にはまずものを読め、という蓮如上人は、この間五百回忌をいたしました、もう五〇〇年くらい前からこういうことを言ってきているのです。ですから、江戸時代の寺子屋ではない。江戸時代は三〇〇年続いたとしても、そういう蓮如上人の時代でも「物を読め」。幼きものも、物を読め、と

言ってきたそういう流れが日本人がしっかりと、読み書きそろばんとか、物を読みしっかりと理解し、しっかりと社会の一員として立って行こうという、そういう精神が流れていると思うのです。まあ、そんなことを私は思いました。我々の頃は小学校でも暗記せよと国語の先生は言われ、良い言葉は暗記せよと言われ、暗記させられて、皆の前で暗記してすらすら間違いなく全部言えたらよし、なんて言われたこともあったのですけれども、中学の時もあったかな。強制的に暗記させられたことも頭に入っていて、今は途切れ途切れですけど、思い出すと出てくるというのもあります。ですから声を出して読む、暗記する。こういうのも大事な要素ではないかと思っております。今なかなか暗記せよとか、声を出して読め、と言わないようなものが散見されるのではないかと思うけれど、やっぱり一つは読むっていう場合は声を出して読む、良いと思った言葉を暗記するのは、小さい時に覚えた言葉は結構歳をとっても覚えております。教育の原点はそういうところにあるかなあと思います。歳をとってから暗記せよと言われても、私はともとても苦手です。私は思いますに、若い時はやはりすーっと真っさらですから入っ

ていくと思うのです。そういうことが「幼少なる者には、まず、「物をよめと、仰せられ候う。」と言うところが、教育の大事なところを蓮如上人もおさえていられるなあ、と感じたところでもございました。皆様はいかがでございますでしょうか。またその後は『その後は、「いかによむとも、復せずは、詮あるべからざる」由、仰せられ候う。』。

これも教育のね、ただ一回やったからやったというのではなく、復すれば、復習というか、何回か繰り返す。同じことを繰り返すことはとても身に付くのですね。駅前の英語NOVAといったか、よく身に付くと言ったけれども、何回も復習すると身に付くというものがあるのですね。一回で身に付くのは天才かもしれない。秀才は何回もやって秀才かもしれない。私の親が大体勉強する奴は馬鹿になる、と。そこだけは素直で勉強しないで済まして、後悔しているというのがここに立って言っているというわけなのです。やっぱり天才、一回聞いただけ聞いたら分かっちゃう、読んだら分かっちゃう、というのは別格とすれば、後は、何回も復習して身に付くというのが基本ではないかと思うのです。そういうことが幼い時が大事だと。こういうことは教育の原点で大事な一点を示

していると思います。唯奈ちゃんだってもう日本語を話したらわかるよね。動作などで察知して。それから真由ちゃんは小学校何年生。六年生になって今度中学校へ行くの。さつき宿題しながらここに参加しているのですよ。「第二次世界大戦と太平洋戦争は同じですか、おじいちゃん。」と言われたから。うーん、うーんと。もつと言えば第二次世界大戦は世界的に広がった戦争。太平洋戦争は連合国と日本が戦争をやったと区別をして言いたかったですが、それを言っただめだと思って、第二次世界大戦と太平洋戦争は同じ。というところに留めるのに苦労しましたけれど。小学生ならこれでいいでしょうが、もうちよっと大きくなっていくと詳しくなってくる。第二次世界大戦と太平洋戦争の概念は、と。さつき商店街の概念と駐車場の概念と稲垣さんに失礼なことを言ってしまったけれど、そういう概念というの難しいことを住職は言う。難しいことではないですよ。そういうことがなかなかそれでいいですよと言えない。だからさつき坂道が、近道だったのが私分からないからでした。

朝の挨拶で若い時は奥秩父も丹沢も縦走した、尾根を歩いたと。山の本を読んだら道を迷ったら必ず迷った地点まで戻るのだと。絶対自分の勘で行ってはいけない。それがセオリーだと。幾つもの山の本を読んで人生生きております。例えば、迷って一時間かかって獣道には行ってしまったら、迷った地点まで一時間かけて戻れと。それは鉄則です。それは秩父で私も縦走して行って、何回も迷ったこともあります。それこそ夜、懐中電灯で、一人で誰もいない真つ暗闇のなかを、間違ったところに戻ってくると、岩があって、人間の足跡がないのです。石があつて、皆間違えるのは、たとえば岩を巻いて右に降りる、右に巻いていくところが本道、山道に岩があると、足跡が残らない。そして左の方に皆迷う。そこは草が踏まれるから道が出来る。結構すぐ無くなるのもあるのだけれども、延々と一時間くらい続いたのもあつた。皆迷つて戻つたのだろう。私も一時間くらいかけて戻つてその地点に来たら、岩があつて石の床になつていたのですよ。足跡が残らない。草が生えない。そこが実は迷い点であつて右に行くべきであつた。下りたらちゃんと道が出来ているのだ。人生を表すと思う。山登りでは迷ったら迷った地点ま

で戻れ、というのは山の鉄則なのです。一つ私も青春時代山登りとして、山の本をいくつも読んで人生の参考になっております。そういうことも思いましたが、要するに迷うことはいいのですよ。発見もあるし、学びもあるのです。迷ってはいけないのではないのです。迷っていけるといふところに実はお念仏と。安心して迷っていけるといふようなのが念仏であって、迷ってはいけないと言っては自分だって迷い迷いしてきたのに。喩えば、若い者に迷ってはいけなと言ったらそれは間違いであって、迷いの中に新しい発見があり、ノーベル賞だって偶然に失敗したりしたところに新しい発見があるとか、語ればいっぱいあるわけです。だから、ただ迷っていけという前に、迷っていく中に念仏して大いに迷っていけと言えば凄いい教育者であると。先に言っておこうと。真ん中あたりと言っておこうと思うのです。

どう三十分。時間あったらまだ大丈夫ですか。大体のりのりだと止まらなくなつてしましますから。まだ文章は『復せずは、詮あるべからざる』由、仰せられ候う。』と

いうことでございますから。まあそういうことで、前半は教育ということの大事さを言われていたと思われました。蓮如上人は中興の祖と言われた人です。親鸞聖人だけでは、七百五十年今日教えが伝わっていなかったと思う。八代目の蓮如上人が全国的に展開して最大の教団にもつてきたわけです。だから親鸞聖人、蓮如上人お二人の力があって、今七百五十年、今、ここにお念仏が届いている。こういうこともご苦労の歴史なのです。ただ余計なことを言うと、教学的なことを言うと、それは親鸞教学だ、蓮如教学だということとでて出てくる場所もあるのですが、私はやはり親鸞聖人、蓮如上人お二人のご苦労があつて今日まで七百五十年、私まで念仏の教えが届いてくださった。と、本当に思う事であります。さて、それでは、次の後半へいってみようと思えます。「ちとこころも」どこで点を切るか難しいのですが、「ちとこころもつき」、つきとは、いろいろな心に思いつくことがある。ものを思う。要するに自我が発達してきて、自分がだんだん子供から大人になってきて、色々物を見たり考えたりしてこれ違うのではないかとか、もつとこうすべきではないか、とこう気づいてくるようなそういう大人に成長してきた

頃に入ってくるのです。幼少の頃からね。『こころもつき候えば、「いかに物をよみ、声をよくよみしりたる」とも、義理をわきまえてこそ」と、仰せられ候う。』要するに幼い時は真つさらですから、読み書きそろばんと、何回もやりなさいと言って身に付いて、すぐくなっていくわけです。暗記しなさいといえは、暗記するとか、だけれど、大人になつてくるとこれは暗記ではないよ、これはこうではないか、と私みたいな勉強しないのは屁理屈が多くなつてくる。そういう年頃になつて今、七十三ですけれども、そういう理屈を言うのも大人への関門なんです。『いかに物をよみ、声をよくよみしりたる」とも、義理をわきまえてこそ」と、仰せられ候う。これは子供から大人へ入つてきた、青年時代に入つてきたと置き換えれば、要するに、屁理屈ばかり言うのではない。道理、義理と書いておりますが義理をわきまえてこそと。問題は、ここは義理なのです。義理人情は日本人の得意なところですが、義理とは、道理とか意義という事であつて、義理人情の義理と見ないで、道理をわきまえて、ここは解積しなければ世間通途の義理になつてしまうかもしれない。これは道理。要するに、真

実の道理というものをしっかりわきまえてものを申せよと。こういうことになってきて初めて立派な青年、大人の仲間入りができるのだと。こういう風に理解してもらおうと成長の度合いがわかってくると思う。小さい時は道理など教えると理屈ばかりで何も恐れないから、幼い時はしつかりまずそうやって暗記させるとか、基本をやらせる。だんだん大人になってきたら生意気になってくるから、その道理をわきまえなくては大人ではないぞ、とこういうわけです。

次に進むと三転回しているのですよ。『その後は、「いかに文釈をおぼえたりとも、信がなくはいたずらごとよ」と、仰せられ候う。』さあ立派にものを知ったと。道理もわきまえた。どんな本を読んでも俺は解釈できるのだと。理解できるのだと、乃至それを発展できるのだと。こうやって天狗になって留まってはいけない。「信がなくはいたずらごとよ」と。それは何かというと、人間はエゴイスト、自己中心ですから自分が知ったもの、やったもの、経験したもの、体験したもの、考えて発明したものとか発見ま

でいってもいいと思うけれど、俺が俺がの権化ですから。私を見ればわかるでしょ。

(笑)。そういうことはあまり言わないで、という話はあるけれど。要するに自己中心性なのです。自分がやったもの、身に付けたものは俺のものだ、俺が苦勞してやってきたのだと。といって天狗になってしまいます。そうして自分を良しとして信じている。それは自信過剰。自信があるのはいいのですよ。唯、世間という自信は知識を覚え、技術を覚え、身に付いてどんなものでも解釈して日本語だったら英語に、英語だったら日本語に、フランス語だったら日本語にとか、日本語をドイツ語に。すごい人だなあとか、そう思うかもしれないけれど、それはピンからキリまで、学者までいっても、学者のなかでもあり、専門家でもある。その中でも大変な深さの違いがあるわけです。一つ経てくると俺がという、自分というものが主体となってしまうと。言ってみれば主語が、自分が、私が、俺が、ということ留まっていけないのだよ、ということなんです。そうやってきたものを自分がなんでもやったのではなく、先人がずっとそういう苦勞をして、そういう本を作り、文章を作り、そういう数学とか、論理とか、いろんなものを先

人が積み重ねてきたものを、お前がつまんで食ってわかって、ちょっとやって天狗になつていただけではないか、といわんばかりです。そうではなくて、そういうものを全部「如来」のなさしめた中に生かされている、という謙虚なものがなければだめだよ、という信は「如来」から賜りたる信という自信なのです。自分を良しとする自信ではないのです。そういうものも全て「如来」より賜りたる本当に信でありました。そこに私が、本当に頂き、自らが、自らであつて良かったという自信がここに、「南無阿弥陀仏」として本当にどんな困難な娑婆世界の現実であつても、それこそ上り坂下り坂まさかの坂も紆余曲折する、こういう山道の中も、下り坂も、断絶する断崖絶壁に立つて身を震わせようともし、「南無阿弥陀仏」だよ。大丈夫だよ。人生はそういう紆余曲折する中に本当に立ち止まつて進めない、立ち尽くすようなところもあるし、後退したいけれども後戻りできないとか、前に進めない。そうして立ち止まつても、足がぶるぶる震えて寝ても覚めても転がつても立ちどころがない。みんなある程度は経験しているわけです。そういうのを仏法では「二河白道」という「求道ぐどう」の人の道として、本当にみんなの胸を

打つ物語が「二河白道」として語られているわけです。知らない人には知らない、知っている人は知っているでしょうが、どこまで知っている、どこまで知らないかあるかもしれないけれど、ちょっと簡単に言うのと、自分がやろうと思つて頑張つてやつてきた。しかし目の前に火の河と、水の河が滔々とうとうと流れ、怒涛逆巻どとうさかまく。火焰かえんが焼く。一歩行つたら死んでしまう。そういうところまで来た。前に行こうか後ろに戻ろうかと思つたら戻るも死、留まるも死、行くも死。そういう状態さんじょうしが三定死として道を求めたところに現われると書いてあるのです。ここまで来たのだから行こうと言つて一歩踏み出すその細い白道。火の渦、火焰をもつて焼く、水が怒涛逆巻く。細い四、五寸ばかりの白道をなお二、三歩行くと東の岸から汝一心にこの道を尋ねていけ、死を恐れることなしと、お釈迦様が尋ねて行けとこうお声が聞こえてくる。こういう声ですよ。「声をよくよみしり」。人間の声ではないですよ。お釈迦様の声が聞こえるということですよ。それからもうちよつと行くと、西の岸から阿弥陀様が汝一心に来たれと。汝を護らんとこう言っている声が聞こえると。それで東からはお釈迦様の声、西からは阿弥陀様の声が聞こえる。そ

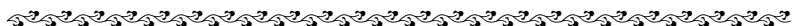
して行人はたった一人孤独というか、独立というか、単独者というか、独りひとりなのです。仏法は独りなのです。生まれてくるのも独り。生きるのも独り。死していくのも独り。という中に私自身がここに道ありと、はつきりと、そしてどんな困難があっても死んでも、死したらおしまいではない。死しても永遠の命への出発だという大きな世界への、もっと大きなものへ向かっていくような、大きな教えなのです。まあ、こんなことを話しましたが、声というのも、私のがあが声かれたようなしわがれた声だけではない。きれいな声とかだけではない。如来の声、お釈迦様の声、阿弥陀様の声なき声が聞こえるところに、人間は本当に素直になつて本当に俺が俺といった俺がの権化が、本当に生かされてありがたいことである。私はこの道を行こうと、これが「求道者ぐどしや」、念仏者ねんぶつしや、行人ぎやうにんということなのです。それが本当の孤独者でもない、単独者でもない、独立者としてたった独り行く中に共に行く、という大きな世界が開かれるのだというこういうことを蓮如上人はおっしゃりたかつたのではないかと、蓮如上人が亡くなつて五百年位経つと思うし。親鸞聖人が亡くなつて七百五十年過ぎることになるわけですが、うんまあ、

光照寺の住職、良いだろうなんて声なき声が聞こえたように錯覚したところで終わりに
しましょうか。

時間はどうですか。オーバーしましたか。ではそういうことで。一つお念仏を申して、
我々は年取ってから学ぶのではない。聞法会は勉強のように思うけれど違うのですよ。
教典を鏡として己を知るといふことであって、お勉強ではないのです。若い時には大い
に勉強せよ。歳をとったら生死しょうじけつちやく決着。生老病死を超えていくものをしっかりとお聖教に
学ぶ。勉強ではありません。余計なことを申しました。本日はありがとうございます。
玄吾先生の名代をこのように勤めさせていただきました。失礼いたしました。「南無阿
弥陀仏」。ありがとうございます。

資料

東西 分立前	1 親鸞 - 2 如信 - 3 覚如 - 4 善如 - 5 綽如 - 6 巧如 - 7 存如 - 8 蓮如 - 9 実如 - 10 証如 - 11 顕如 -	
東西 分立後	大谷派	12 教如 - 13 宣如 - 14 琢如 - 15 常如 - 16 一如 - 17 真如 - 18 従如 - 19 乗如 - 20 達如 - 21 嚴如 - 22 現如 - 23 彰如 - 24 闡如 - 25 淨如 -
	本願寺派	12 准如 - 13 良如 - 14 寂如 - 15 住如 - 16 湛如 - 17 法如 - 18 文如 - 19 本如 - 20 広如 - 21 明如 - 22 鏡如 - 23 勝如 - 24 即如 - 25 専如 -



【蓮如上人妻子】

第1夫人：如了

1男：順如、1女：如慶、2男：蓮乗、2女：見玉、3男：蓮綱、
3女：寿尊、4男：蓮誓

第2夫人：蓮祐

5男：**実如** - **本願寺第9世**、4女：妙宗、5女：妙意、
6女：如空、7女：祐心、6男：蓮淳、8女：了忍、9女：了如、
7男：蓮悟、10女：祐心

第3夫人：如勝

11女：妙勝

第4夫人：宗如

12女：蓮周、8男：蓮芸

第5夫人：蓮能

13女：妙祐、9男：実賢、**10男：実悟**、11男：実順、12男：実孝、
14女：妙宗、13男：実従

あとがき

本書は光照寺旅行『彩の国を巡る旅、秩父観光と長瀬舟下り・国宝妻沼の聖天山へ』と題して、平成二七年十一月二十一～二十二日の一泊二日の旅行（旅行幹事、川澄英明氏、淡海雅子氏、谷口正司氏）を企画した中で、初日の十一月二十一日に三峰神社へ参拝した後、ホテルまでの帰りのバスの中でご法話を頂いた記録です。

当初は、佐々木玄吾先生にご法話を頂戴する予定でしたが、先生が体調不良で欠席となった為、講題を引き継ぎ、代役が住職に託されました。ご法話はホテルに到着した後、夕食前に頂く予定でしたが、渋滞などにより旅程が遅れた関係で、急遽、初日の観光を終えてホテルまでのバスの中でご法話を頂く形になりました。

住職にはバスに揺られながらのご法話で大変でしたが、参加者の皆様と共にご法話に耳を傾けて聞きました。教育の大事さ、道理をわかまえる、信がなければいたざらごと、の三転回として『蓮如上人御一代記聞書』二一五条を読むことを学ばせて頂きました。

住職には原稿に目を通して頂き校正賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。ご法話のテープを原稿に起こして下さいました、護持会役員の淡海雅子様、校正を手伝ってくれた役僧の池津徳彦氏に感謝申し上げます。合掌

平成二八年十一月二十六日

光照寺 副住職 池田孝三郎



住職法話



農園ホテルにて

光照寺旅行

「信がなくはいたずらごとよ」法話

光照寺住職 池田 孝郎

2016年（平成28年）11月26日

発行 真宗大谷派 弘興山 光照寺

事務局 〒331-0821

埼玉県さいたま市北区別所町102-2

電話 048-651-2781